

TAPで育成したい人材像とIBとの親和性についての研究

Research on the Affinity Between IB and the Image of Human Resources to be Developed in TAP

工藤 亘

Wataru Kudo

キーワード：TAP、IBの学習者像、親和性、Risk-takers

Keywords：TAP, IB learner profile, affinity, risk-takers

1. はじめに

玉川学園は創立以来、「全人教育」を教育理念の中心とし、人間形成には真・善・美・聖・健・富の6つの価値を調和的に創造することを教育の理想としている。その理想を実現するために12の教育信条（全人教育、個性尊重、自学自律、能率高き教育、学的根拠に立てる教育、自然の尊重、師弟間の温情、労作教育、反対の合一、第二里行者と人生の開拓者、24時間の教育、国際教育）を掲げ、日々の教育活動を行っている。

白柳（2016）によれば「1952（昭和27）年6月に『玉川学園の教育』の初版が出、1955（昭和30）年4月に改訂第一版が発行され、この時初めて12の教育目標が表された¹⁾」ことがわかり、この12の教育目標の1つに「国際教育」がある。ちなみに初めて「玉川教育十二信条」という言葉を用いたのは、1960（昭和35）年の設立30周年記念誌「玉川教育」である。

玉川大学では全人教育の理念に加え、冒険教育の父と称される Kurt Hahn が1967年に設立したラウンド・スクエアの教育の柱「IDEALS」を人生における究極的な目標と定めている。IDEALSとは、Internationalism（国際理解）、Democracy（民主主義の精神）、Environment（環境問題に対する意識）、Adventure（冒険心）、Leadership（リーダーシップ）、Service（奉仕の精神）の頭文字である。2000年から実践と研究を行っている玉川大学の玉川アドベンチャープログラム（以下、TAPと記す）は、「Hahnの教育哲学や思想²⁾とIDEALSの影響を受けている。

またHahnは1968年、「チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確保すること³⁾」を目的として国際的な教育プログラムである国際バカロレア（IB：International Baccalaureate、以下、IBと記す）に携わっている。

文部科学省はグローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」（2011年6月）において、グローバル人材に必要な要素を「Ⅰ. 語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ. 主体性・積極性・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーとした。このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・

解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等⁴⁾とした。

第2次安倍内閣の成長戦略である日本再興戦略（2013）では、「世界と戦える人材を育てる⁵⁾」を目標とした。具体的には①初等中等教育段階からの英語教育を強化する、②グローバル化に対応した教育を行い、高校段階から世界と戦えるグローバル・リーダーを育てる「スーパーグローバルハイスクール（仮称）」を創設する等である。

そして世界に勝てる真のグローバル人材を育てるため、国際的な英語試験の活用、意欲と能力のある若者全員への留学機会の付与、及びグローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成（「スーパーグローバルハイスクール（仮称）」「国際バカロレア認定校等の大幅な増加」）を図ることにより、2020年までに日本人留学生を6万人から12万人へ倍増させることを目指したのである。

日本経済団体連合会（2013）は「世界を舞台に活躍できる人づくりのために—グローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言—」において、「語学力のみでなく、コミュニケーション能力や異文化を受容する力、論理的思考力、課題発見力などが身に付くIBディプロマ課程（16～19歳対象）は、グローバル人材を育成する上で有効な手段の一つである⁶⁾」と示している。

以上を踏まえ本研究では、玉川学園12の教育目標の1つである国際教育やIDEALSの国際理解を促進させるために、IBのRisk-takersとTAPのアドベンチャーとの関係性について考察し、TAPで育成したい人材像とIBの学習者像との親和性について検討することを目的とする。

2. IBの学習者像と玉川学園の教育

IBとは、1968年にスイスのジュネーブで発足した国際バカロレア機構が実施する国際的な教育プログラムである。IBプログラムは、国際的な視野をもち、人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としている。

この目的のためにIBは学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいる。そしてIBプログラムは、世界各地で学ぶ子供たちに①人がもつ違いを理解すること、②自分とは異なる考え方もつ人々にもそれぞれの正しさがあり得ること、③それを認めることができる人として積極的に共感する心をもつことを生涯、学び続けるように働きかけている。

IBの学習者像は「探究する人・知識のある人・考える人・コミュニケーションができる人・信念をもつ人・心を開く人・思いやりのある人・挑戦する人・バランスのとれた人・振り返りができる人⁷⁾」である。（表1）

荒木（2021）は、IBの学習者像から「IBが目指しているのは全人教育であり、学習者が主体的に取り組む学びを重視していることがわかる⁸⁾」と指摘する。

全人教育を教育理念とする玉川学園は、2009年に中等教育プログラムであるMYP（Middle Years Programme）の認定を受けIBの認定校となった。さらに2010年に16歳から19歳対象（日本では高校2・3年で実施する大学進学準備）の2年間プログラムであるDP（Diploma Programme）の認定を受け、IBスクールとして教育活動を展開し、現在に至っている⁹⁾。

大迫は（2013）は、「DPが単に六つの学習領域だけをこなせばよい学習オンリーのプログラム

ではない、すなわち『全人教育プログラム』¹⁰⁾である」と示し、先述の荒木（2021）の指摘と合わせてIBと玉川学園の教育が親和的であることがわかる。

表1. IBの学習者像

<p>探究する人 INQUIRERS</p>	<p>私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。</p>	<p>心を開く人 OPEN-MINDED</p>	<p>私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。</p>
<p>知識のある人 KNOWLEDGEABLE</p>	<p>私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。</p>	<p>思いやりのある人 CARING</p>	<p>私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。</p>
<p>考える人 THINKERS</p>	<p>私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。</p>	<p>挑戦する人 RISK-TAKERS</p>	<p>私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組めます。</p>
<p>コミュニケーションができる人 COMMUNICATORS</p>	<p>私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のもの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。</p>	<p>バランスのとれた人 BALANCED</p>	<p>私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。</p>
<p>信念をもつ人 PRINCIPLED</p>	<p>私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々をもつ尊敬と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。</p>	<p>振り返りができる人 REFLECTIVE</p>	<p>私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すために、自分の長所と短所を理解できるよう努めます。</p>

3. IBのRisk-takersとTAPのアドベンチャー

IBの学習者像の1つに「Risk-takers」がある。Risk-takersは、特にPYP（Primary Years Programme：3歳～12歳）で重視され、小学生から挑戦する人を育てることが重要であることを意味している。

玉川学園では小学生からTAPを通じてIBの学習者像の1つであるRisk-takersや人生の開拓者を育てており、残りの9つの学習者像もTAPで育てたい人材像（全人を目指す人、多様性を受容できる人、知識と心が豊かな人、コミュニケーション力がある人、探究心がある人、アドベンチャーができる人、リーダーシップとフォロワーシップを発揮できる人、倫理観のある人、相互尊重ができる人、学び続ける人）とも親和性が高いと考えられる。

一般的にRisk takingとは、リスクを認識しつつ敢えてそのリスクを受け入れて挑戦することである。IBではRisk-takersを不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合うことができる人とし、ChallengerではなくRisk-takersと表現している。

TAPではアドベンチャーの定義を「成功するかどうか不確かなことに敢えて挑戦すること」¹¹⁾とし、自らの意思決定において、安心安全で快適なC-zoneから不慣れで少し不安に感じるS-zoneあるいはP-zoneに一步踏み出し、失敗するリスクを承知の上で挑戦することに意義と価

値を認めている。この意味においてIBのRisk-takersとTAPのアドベンチャーは非常に関連性が高いと考えられる。

リスクは様々な分野で扱われているため、定義が多く存在する。例えばリスク学事典（2000）では、リスクの一般的な定義を「人間の生命や経済活動にとって、望ましくない事象の発生の不確実さの程度およびその結果の大きさの程度」¹²⁾としている。Nick（2000）は「ある一定の時間の中で、具体的な不利益な出来事が起こる確率」¹³⁾とリスクを定義している。ISO31000（2009）では「目的に対する不確かさの影響（期待されていることから好ましいまたは好ましくない方向に乖離すること）」¹⁴⁾をリスクとしている。Fischhoff & Kadvaný（2011）は「リスクは何らかの価値を失う可能性についての概念」¹⁵⁾とし、価値が異なれば「リスク」の定義も異なると指摘する。

またリスクの分類も多様である。例えば①純粋リスク（損失のみを発生させる危険）と投機的リスク（利益または損失のどちらの発生の可能性もある危険）、②客観的リスクと主観的リスク、③内部リスクと外部リスク等が挙げられる。

TAPのアドベンチャーには不確実な要素であるリスクが多く含まれ、心身共に時として望ましくない事象が起きる可能性はゼロとは言えない。しかし、全てのリスクを取り除くことが教育的な効果として正しいとも言いきれない「危険の両義性」¹⁶⁾がアドベンチャーの要素には含まれており、失敗体験や危険性も学びの重要な要素とTAPでは考えている。

リスクは、その要因（人的要因・環境要因）から心理的・物理的な危険を察知し、自ら危険を回避する能力や安全管理能力の育成につながるため、全てを取り除くことが望ましい訳ではない。またApter（1992）は「探究心がなければ子供は成長しない」¹⁷⁾とし、リスクを承知の上で子供が周りの環境を探究し、自分の能力を試すことの重要性を指摘する。

以上を踏まえると、TAPでは闇雲に何でもリスクをとることが望ましいRisk-takersであるとは考えていない。影響要因（年齢・知識・状況・経験等）を考慮し、TAPを通じて①子供自身でリスクを知覚でき、②リスクをとる価値があるのかどうかを適正に評価できるように育て、③リスク回避か成長のためにアドベンチャーをして、価値あるリスクをとる意思決定ができるようにしたいのである。（図1）

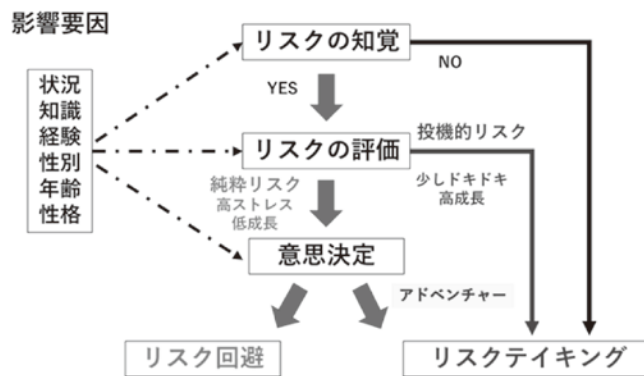


図1. リスク回避とリスクテイキング

4. TAPで育成したい人材像とIBの学習者像

TAPセンターは玉川大学高等教育付置機関であり、玉川大学の「卒業認定・学位授与の方針」であるディプロマ・ポリシー（以下、DPと記す）に準拠するのは当然のことである。そのDPでは、以下の学士力を修得している人材を養成することを目指している。

- (1) 知識・理解（多文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）
- (2) 汎用的技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）
- (3) 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力¹⁸⁾

この学士力とTAPで育成したい人材像は、以下の通りに関連していると考えられる。（表2）特に知識・理解（多文化・異文化に関する知識と理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）は、全人教育を実現させるための12の教育信条の1つである国際教育に直結していると考えられる。

玉川学園では創立以来、国際教育を掲げ国際人の育成に努めてきた。近年は、海外提携校の数が35校を超え、幼稚部から大学にいたるまで段階に応じた国際教育・交流プログラムの数も年々増加している。積極的に海外との交流を行うことで豊かな国際感覚と広い視野を養い、グローバル化時代に求められる人材の育成を推進している¹⁹⁾。

その一翼を担っているTAPセンターでは、玉川学園の児童生徒及び玉川大学の学生と、米国のハーカースクール児童、台湾の稲江高校やブラジル松柏・大志万学院の生徒等と一緒にTAPを実践し、国際教育・交流プログラムに貢献している。

表2. 玉川大学のDPとTAPで育成したい人材像

玉川大学ディプロマ・ポリシー		TAPで育成したい人材像	
知識・理解	多文化・異文化に関する知識の理解	多様性を受容できる人	全人を 目指す人
	人類の文化・社会と自然に関する知識の理解	知識と心が豊かな人	
汎用的技能	コミュニケーション・スキル	コミュニケーション力がある人	
	数量的スキル	探究心がある人	
	情報リテラシー		
	論理的思考力		
	問題解決力	アドベンチャーができる人	
自己管理能力			
態度・志向性	チームワーク リーダーシップ	リーダーシップとフォロワーシップを 発揮できる人	
	倫理観	倫理観のある人	
	市民としての社会的責任	相互尊重ができる人	
	生涯学習力	学び続ける人	

表2を踏まえ、TAPで育成したい人材像とIBの学習者像は、共にHahnの教育哲学や思想が反映されているため非常に重複する点が多く、親和性が高いと考える。(表3)

表3. TAPで育成したい人材像とIBの学習者像

IBの学習者像	TAPで育成したい人材像	
探究する人	探究心がある人	正解の不確かなこと対し、その本質・意義・価値などを深く考え、与えられた課題を超えて追及する逞しさや+αへの挑戦をする人を目指します。
知識のある人	知識と心が豊かな人	先人の教えや最先端の知識・技術に触れるのみではなく、多様な体験や労作を通じて心も豊かな人を目指します。
考える人	リーダーシップとフォロワーシップを発揮できる人	誰かのために行動し、何らかの好影響を与えられる人を目指すと同時に、誰かの行動を支援できる人を目指します。またファシリテーション能力の向上に努めます。
コミュニケーションができる人	コミュニケーション力がある人	言語・非言語のコミュニケーションを巧みに用いることができ、相手の立場や状況を尊重した上で自己主張や傾聴ができる人を目指します。
信念をもつ人	倫理観のある人	道徳性を有し、社会人としてふさわしい行動ができる自律した人を目指します。
心を開く人	多様性を受容できる人	異なる価値観・文化・考え方に触れ、その理解に努めながら互いに受容できる人を目指します。
思いやりのある人	相互尊重ができる人	互いの個性や考えを尊重し、健全で建設的な関わり方ができる人を目指します。
挑戦する人	アドベンチャーができる人	成功するかどうか不確かなことに挑戦し、人生を自分自身で開拓していく人を目指します。
バランスのとれた人	全人を目指す人	真善美聖健富の六つの価値を備え、調和のとれた全人を目指し、教育の12信条や玉川モットーを胸に行動します。
振り返りができる人	学び続ける人	夢や自己実現に向かい、体験での気づきや学びを実生活に応用・転用し続ける人を目指します。

IBは徹底して学習者が主体であり、授業では「学習者同士、学習者と教師が相互作用の中で学びを構築し、個々の異なるものの見方や思考の深め方を尊重する」²⁰⁾ため、教師の役割はファシリテーターであり、その「指導方法には2つの特徴」²¹⁾がある。

その1つは「探究学習」が挙げられる。教師は教科や科目の知識を与えるのではなく、子供自らが探求することで気づきを得られるように全ての教科で探求・行動・振り返りのサイクルを回し、生涯学習者を育成していくのである。その際に教師は、子供の能力を引き出すためにファシリテーターとしての役割を担っている。もう1つは「協働学習」である。授業はグループワークやプレゼンテーション、ディスカッション等を多く導入している。さらに学習指導要領や認定されたテキストに該当するものがないため、各学校や教員が独自にカリキュラムを作成し、授業を行っている。

TAPはグループ活動が中心であり、グループや個人の目標に向かい、それぞれの責任を果たす過程を通して体験学習を行うものである。なすことによって学ぶことを重要視するTAPは参加者が主体であり、体験から得た気づきや学び、知恵や感性等を大切にするのである。

TAPでのファシリテーターは、メンバーが主体的に学ぶプログラムづくりや学習環境づくりを行い、お互いのコミュニケーションを円滑に促進し、それぞれの経験や知恵・意欲を引き出しながら、グループによる知的・情緒的相互作用を支援・促進する働きを担う人（支導者）である。そしてファシリテーターは「メンバーに直接的に指示を与え教え込む指導ではなく、メンバーとの双方向のやりとりを大切にして、個人やグループのプロセスに気づき、その状況を的確に判断し、個人やグループの能力を十分に発揮できるように支援しながら導き支導する人」²²⁾である。

以上の点からも、IBの教師の役割や指導法とTAPでのファシリテーターの役割や関わり方は非常に共通点があると言える。

5. まとめ

グローバル人材の育成が国内外を問わずに求められている今日において、IBプログラムは非常に有効であり、IBにおける10の学習者像や指導法、教師の役割は全人教育を掲げる玉川学園・玉川大学の教育と関連性が高いと考える。また玉川大学のDPに示される学士力とTAPで育成したい人材像は当然関連しており、その人材像とIBの学習者像は親和性が高いと考える。

特にIBの学習者像のRisk-takersはPYPで重視され、小学生から挑戦する人を育てることが重要であり、玉川学園ではTAPを通じて小学生から挑戦する人・アドベンチャーをできる人を育てている。またRisk-takersとは単にリスクをとるのではなく、リスクを知覚し、とるべき価値のあるリスクを適正に判断できるようにTAPを通じて学んでいる。この意味においてもTAPで育成したい人材像とIBの学習者像との親和性が高いと考える。

TAPとIBプログラムの共通点は①学習者が主体であること、②学習者同士、学習者と教師が相互作用の中で学びを大切にする、③それぞれの価値観を尊重すること、④異なる見方や思考の深め方を尊重することである。さらに探求・行動・振り返りを重視する探究学習や、グループワークやディスカッション等を用いた協働学習は、グループでの課題解決を主とする「TAPでの学びのプロセス」²³⁾と共通している。そしてIB教師の指導法や役割はTAPと同様にファシリテーターであり、児童生徒や対象者の能力を引き出し、促進していく支導者である点が共通している。

以上のTAPとIBとの共通点を踏まえ、今後はIBクラスを担当している教員とTAPセンタースタッフが連携を図ることで、より一層、充実した国際教育やグローバル人材の育成が促進できると考える。現在は、IBクラスの自由研究の1つとして「TAP」があり、この担当教員はTAPセンターの兼担である。この担当教員はTAPセンタースタッフと協働しながらプログラムの実践や研鑽を積んでいる。

このようにIBや国際教育をはじめとした教育連携をTAPセンターが推進することにより、玉川学園・玉川大学の教員との関係が構築され、TAPを通じた教育プログラムが開発されると考える。そのためにも、教員向けのワークショップや研究会等をTAPセンターが積極的に主催し、実施していくことが望ましいと考える。

2014年に玉川大学大学院教育学研究科では、IB Educator Certificate（IB教員認定証）取得要

件を満たすIB研究コースが開設され、IB教員の養成が実施されている。また同大学院では2020年よりTAPの理論と実践をもとに「学級ファシリテーター資格」を取得できるようになっており、IB教員にも求められるファシリテーション能力の獲得と向上に寄与している。

玉川学園の教育は、教育を通して知識を得（昨日まで知らなかったことを知るようになり）、技術を身に付ける（出来なかったことをやり遂げることが出来るようになる）ことである。そして玉川教育の使命は、日本社会さらには世界へ貢献する気概をもった人材を養成することである。

以上を踏まえ、VUCAの時代で未知の苦難が横たわっていても玉川学園のモットーを実践できる気概のある人を育てることは重要であり、Risk-takersとして失敗を恐れずに挑戦していく人生の開拓者を育てていくことがTAPの使命でもある。そしてHahnの教育哲学や思想に影響を受けているTAPは、グローバル化が進展した世界を担う若者たちの育成に貢献していきたいと考える。

【引用文献】

- 1) 白柳弘幸「玉川学園 教育十二信条の成立」玉川大学教育学部全人教育研究センター年報2015第2号、2016年、p. 44
- 2) 工藤亘「TAPとKurt Hahnの教育哲学との関係性についての研究—自己冒険力とI.D.E.A.L.Sに着目して—」玉川大学教育学部全人教育研究センター年報2020第8号、2021年、p. 13
- 3) 文部科学省「IBとは」
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>（2021年7月31日閲覧）
- 4) 文部科学省グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf（2021年7月31日閲覧）
- 5) 日本再興戦略
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf（2021年7月9日閲覧）
- 6) 日本経済団体連合会「世界を舞台に活躍できる人づくりのために—グローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言—」
https://www.keidanren.or.jp/policy/2013/059_honbun.pdf（2021年7月9日閲覧）
- 7) 文部科学省「IBの学習者像」
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>（2021年8月1日閲覧）
- 8) 荒木貴之「国際バカロレア」教育の未来を研究する会編『最新教育動向2021』明治図書、2021年、p. 236
- 9) 星野あゆみ「国際バカロレアと全人教育」小原芳明監修『全人教育の歴史と展望』玉川大学出版部、2021年、p. 111
- 10) 大迫弘和『国際バカロレア入門—融合による教育イノベーション—』学芸みらい社、2013年、p. 58
- 11) 工藤亘編著、川本和孝、村井伸二、山口圭介著『アドベンチャーと教育—特別活動とアクティブ道徳教育—』玉川大学出版部、2020年、p. 15
- 12) 日本リスク研究学会編『リスク学事典』TBSブリタニカ、2000年、p. 2
- 13) Nick W. Hurst（花井莊輔訳）『リスクアセスメント』丸善、2000年、p. xii
- 14) 日本リスク管理学会「ISO31000（国際標準）」
<https://ac.risk.or.jp/sub-7/687-2.html>（2021年10月15日閲覧）
- 15) Baruch Fischhoff & John Kadvaný (2011) *RISK:A Very short Introduction*. Oxford University Press, USA, 41
- 16) 近藤剛「アウトドアに潜む危険」星野敏男、金子和正監修『野外活動における安全管理と安全学習』杏林書院、2011年、p. 1
- 17) Michael J. Apter 著、山岸俊男監訳、渋谷由紀訳『デンジャラス・エッジ—「危険の心理学」—』講談社、1995年、p. 274
- 18) 玉川大学の3ポリシー
https://www.tamagawa.jp/university/introduction/information/pdf/3policy2020_university.pdf（2021年10月14日閲覧）
- 19) 玉川の教育 国際教育

<https://www.tamagawa.jp/education/idea/international.html> (2021年12月8日閲覧)

- 20) 高松美紀「新学習指導要領との比較に見るIBの学習スキル」東京学芸大学国際バカロレア教育研究会編『国際バカロレア教育と教員養成—未来をつくる教師教育—』学文社、2020年、p. 86
- 21) 星野あゆみ「真のグローバル人材の要件は言葉+探求心・知識・思考力」先端教育機構出版部、月刊先端教育2020年2月号、2020年、p. 32
- 22) 前掲書11)、p. 37
- 23) 工藤亘「TAPを実践している教師が考えるTAPの意義と課題についての研究—TAPを実践している教師へのヒアリング調査をもとに—」教育実践研究第20号、2017年、p. 28

【参考文献】

- 村越真「野外活動指導者は危険をどうとらえるか」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第39号、2008年
- 広田すみれ、増田真也、坂上貴之編著『心理学が描くリスクの世界—行動的意思決定入門—』第3版、慶應義塾大学出版会、2018年